

# おきなぐさ

宮沢賢治

青空文庫



うずのしゅげを知っていますか。

うずのしゅげは、しよくぶつがく植物学ではおきなぐさと呼ばれますが、おきなぐさという名はなんだかあのやさしい若い花わかをあらわさないようにおもいます。

そんならうずのしゅげとはなんのことかと言われても私にはわかったようなまたわからないような気がします。

それはたとえば私どもの方で、ねこやなぎの花芽はなめをべんべろと言いますが、そのべんべろがなんのことかわかったようなわからないような気がするのと全くおなじです。まったとにかくべんべろという語ことばのひびきの中に、あの柳やなぎの花芽はなめの銀ぎんびろうどのころもち、

なめらかな春のはじめの光のぐあい<sup>じつ</sup>が実にはつきり出ているように、うずのしゆげというときは、あの毛<sup>もう</sup>科<sup>こう</sup>のおきなぐさの黒<sup>く</sup>ろじゆす朱子の花びら、青じろいやはり銀<sup>ぎん</sup>びろうどの刻<sup>きざ</sup>みのある葉<sup>は</sup>、それから六月のつやつや光る冠<sup>かん</sup>毛<sup>もう</sup>がみなはつきりと眼<sup>め</sup>にうかびます。

まつ赤なアネモネの花の従兄<sup>いとこ</sup>、きみかげそうやかたくりの花のともだち、このうずのしゆげの花をきらいなものはありません。ごらんなさい。この花は黒朱子<sup>くろじゆす</sup>でもこしらえた変<sup>か</sup>わり型<sup>がた</sup>のコップのように見えますが、その黒いのは、たとえば葡萄酒<sup>ぶどうしゆ</sup>が黒く見えると同じです。この花の下を始<sup>し</sup>終<sup>じゆう</sup>往<sup>い</sup>つたり来<sup>き</sup>たりする蟻<sup>あり</sup>に私はたずねます。

「おまえはうずのしゅげはすきかい、きらいかい」

蟻ありは活かつぱつ発ぱつに答えます。

「大すきです。誰だれだってあの人をきらいなものはありません」

「けれどもあの花はまつ黒だよ」

「いいえ、黒く見えるときもそれはあります。けれどもまるで燃もえあがつてまつ赤な時もあります」

「はてな、お前たちの眼めにはそんなぐあいに見えるのかい」

「いいえ、お日さまの光の降ふる時なら誰だれにだってまつ赤に見えるだろうと思います」

「そうそう。もうわかったよ。お前たちはいつでも花をすかして見るのだから」

「そしてあの葉はや莖くきだつて立派りつぱでしょう。やわらかな銀ぎんの糸が植うえてあるようでしょう。私たちの仲間なかまでは誰だれかが病びょうき気にかかつたときはあの糸をほんのすこうしもらつて来てしずかにからだをさすつてやります」

「そうかい。それで、結けつきよく局、お前たちはうずのしゆげは大すきなんだろう」

「そうです」

「よろしい。さよなら。気をつけておいで」  
この通りです。

また向むここの、黒いひのきの森の中のあき地に山男がいます。山男はお日さまに向むいて倒たおれた木に腰掛こしかけて何か鳥を引き裂さいて

たべようとしていているらしいのですが、なぜあの黝くろずんだ黄金きんの眼玉めだまを地面じめんにじっと向むけているのでしよう。鳥をたべることさえ忘わすれたようです。

あれは空地あきちのかれ草の中に一本のうずのしゆげが花をつけ風にかすかにゆれているのを見ているからです。

私は去きよねん年のちようど今ごろの風のすきとおったある日のひるまを思い出します。

それは小岩井農場こいわいのうじようの南、あのゆるやかな七つ森のいちばん西のはずれの西がわでした。かれ草の中に二本のうずのしゆげが、もうその黒いやわらかな花をつけていました。

まばゆい白い雲が小さな小さなきれになって碎くだけてみだれて、

空をいっぱい東の方へどんどんどんどん飛びました。

お日さまは何べんも雲にかくされて銀の鏡のように白く光ったり、またかがやいて大きな宝石のように蒼ぞらの淵にかかったりしました。

山脈の雪はまっ白に燃え、眼の前の野原は黄いろや茶の縞になつてあちこち掘り起こされた畑は鳶いろの四角なきれをあてたように見えたりしました。

おきなぐさはその変幻の光の奇術の中で夢よりもしずかに話しました。

「ねえ、雲がまたお日さんにかかるよ。そら向こうの畑がもう陰になつた」



「走って来る、早いねえ、もうから松も暗まつくらくなった。もう越こえた」

「来た、来た。おおくらい。急きゆうにあたりが青くしんとなった」

「うん、だけでもう雲が半分お日さんの下をくぐってしまつたよ。すぐ明るくなるんだよ」

「もう出る。そら、ああ明るくなった」

「だめだい。また来るよ、そら、ね、もう向むこうのポプラの木が黒くろくなつたらう」

「うん。まるでまわり燈籠とうろうのようだねえ」

「おい、ごらん。山の雪の上でも雲のかげがすべってるよ。あすこ。そら。ここよりも動うごきようがおそいねえ」

「もうおりて来る。ああこんどは早い早い、まるで落おちて来るよ」

うだ。もうふもとまで来ちやった。おや、どこへ行つたんだらう、見えなくなつてしまつた」

「不思議だねえ、雲なんてどこから出て来るんだらう。ねえ、西のそらは青じろくて光つてよく晴れてるだらう。そして風がどんな空を吹いてるだらう。それだのにいつまでたつても雲がなくならないじゃないか」

「いいや、あすこから雲が湧いて来るんだよ。そら、あすこに小さな小さな雲きれが出たろう。きつと大きくなるよ」

「ああ、ほんとうにそうだね、大きくなつたねえ。もう兎ぐらいある」

「どんどんかけて来る。早い早い、大きくなつた、白熊しろくまのよう

だ」

「またお日さんへかかる。暗くなるぜ、奇麗だねえ。ああ奇麗。雲のへりがまるで虹で飾ったようだ」

西の方の遠くの空でさつきまで一生けん命啼いていたひばりがこの時風に流されて羽を変にかしげながら二人のそばに降りて来たのでした。

「今日は、風があつていけませんね」

「おや、ひばりさん、いらつしやい。今日なんか高いところは風が強いでしようね」

「ええ、ひどい風ですよ。大きく口をあくと風が僕のからだをまるで麦酒瓶のようにボウと鳴らして行くくらいですからね。わ

めくも歌うも容易よういのこつちやありませんよ」

「そうでしょうね。だけれどここから見てみるとほんとうに風はおもしろそうですよ。僕ぼくたちも一ぺん飛とんでみたいなあ」

「飛とべるどこじやない。もう二か月お待ちまなさい。いやでも飛とばなくちやなりません」

それから二か月めでした。私は御明神ごみょうじんへ行く途とちゆう中もう一ぺんそこへ寄よつたのでした。

丘おかはすっかり緑みどりでほたるかずらの花が子供こどもの青い瞳ひとみのよう、小岩井いわいの野原には牧草ぼくそうや燕麦オートがきんきん光あかりっております。風はもう南から吹ふいていました。

春の二つのうずのしゆげの花はすっかりふさふさした銀毛ぎんもうの

房ふさにかわっていました。野原のポプラの錫すずいろの葉はをちらちらひるがえし、ふもとの草が青い黄金きんのかがやきをあげますと、その二つのうずのしゆげの銀毛ぎんもうの房ふさはふるふるえて今にも飛とび立ちそうでした。

そしてひばりがひくく丘おかの上を飛とんでやって来たのでした。

「今日は。いいお天気です。どうです。もう飛とぶばかりでしょう」  
「ええ、もう僕ぼくたち遠いとこへ行きますよ。どの風が僕ぼくたちを連れて行くかさつきから見ているんです」

「どうです。飛とんで行くのはいやですか」

「なんともありません。僕ぼくたちの仕事しごとはもう済すんだんです」

「こわかありませんか」

「いいえ、飛とんだつてどこへ行つたつて野はらはお日さんのひかりでいっぱいですよ。僕ぼくたちばらばらになろうたつて、どこかのたまり水の上に落おちようたつて、お日さんちやんと見ていらつしやるんですよ」

「そうです、そうです。なんにもこわいことはありません。僕ぼくだつてもういつまでこの野原にいるかわかりません。もし来年もいるようだったら来年は僕ぼくはここへ巣すをつくりましますよ」

「ええ、ありがとう。ああ、僕ぼくまるで息いきがせいせいする。きつと今度こんどの風だ。ひばりさん、さよなら」

「僕ぼくも、ひばりさん、さよなら」

「じゃ、さよなら、お大事だいじにおいでなさい」

奇麗きれいなすきとおった風がやつて参まいりました。まず向むここのポプラをひるがえし、青の燕麦オートに波なみをたてそれから丘おかにのぼって来ました。

うずのしゆげは光つてまるで踊おどるようにふらふらして叫さけびました。

「さよなら、ひばりさん、さよなら、みなさん。お日さん、ありがとうございました」

そしてちようど星くたが砕くだけて散ちるときのように、からだがばらばらになって一本ずつの銀毛ぎんもうはまっしろに光り、羽虫はねむしのように北の方へ飛とんで行きましました。そしてひばりは鉄砲玉てっぽうだまのように空へとびあがって鋭すどどいみじかい歌をほんのちよつと歌つたのでした。

私は考えます。なぜひばりはうずのしゆげの銀毛ぎんもうの飛とんで行つた北の方へ飛とばなかつたか、まっすぐに空の方へ飛とんだか。

それはたしかに、二つのうずのしゆげのたましいが天の方へ行つたからです。そしてもう追おいつけなくなつたときひばりはあのみじかい別わかれの歌を贈おくつたのだらうと思います。そんなら天上へ行つた二つの小さなたましいはどうなつたか、私はそれは二つの小さな変光星へんこうせいになつたと思います。なぜなら変光星へんこうせいはあるときは黒くて天文台からも見えぬ、あるときは蟻ありが言いつたように赤く光つて見えるからです。







# 青空文庫情報

底本：「銀河鉄道の夜」角川文庫、角川書店

1969（昭和44）年7月20日改版初版発行

1993（平成5）年6月20日改版71版発行

入力：薦田佳子

校正：平野彩子

2000年8月25日公開

2012年2月16日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# おきなぐさ

宮沢賢治

2020年 7月12日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>